

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月28日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立三島南高等学校	氏名	渡邊 心花	学年	2

1 目的・応募理由

私は異なる文化や価値観に直接触れることで、自身の視野を広げ、将来の学びや仕事にいかせる経験を得たいと考え、海外インターンシップに申し込みました。現地の方々との交流や実際の生活の環境を体験することで、語学力やコミュニケーション能力をさらに向上させたいと考えたことに加え、将来は国際的な仕事に就きたいという思いも、このインターンシップに参加する大きな動機となりました。

2 研修内容等

○実施前研修

- ・参加生徒全員に対する事前研修
- ・今後の全体的な研修日程についての説明・確認
- ・事業の趣旨説明
- ・渡航ガイダンス
- ・グループ別研修

○国内研修

- ・会社概要、事業概要、企業理念、行動指針6か条、フィロソフィー、業務内容の説明
- ・インドネシアについての説明
- ・現地ホテルについての説明

○海外研修

- ・施設見学
- ・現地の方々との交流会



3 感想等

今回私はこの活動を通じて、多くの感動と学びを得ることができました。

初めての海外渡航に関しては不安が大きく、事前研修や国内研修を終えた後も、果たして楽しむことができるのか、また多くのことを学んでこられるのかと、不安でした。しかし、いざインドネシアに到着すると、目にするもの、口にするもの、言葉を交わす人々、そのすべてがこれまでに馴染みのないものであり、不安よりもむしろその膨大な情報量に圧倒され、胸の高鳴りを抑えられない3日間となりました。

研修中に特に大きな学びを得たのは、現地の方々との交流会です。そこで私は、日本との文化の相違や現地の人々の温かさ、国特有の課題、さらには他国の方々からも受け入れられる日本企業の素晴らしさを実感しました。こうした、現地に行かなければ得られない多くの気づきや感動から、私が学び、今後に生かしたいと思ったことは、“相手への理解を大切にすること”です。日本企業が海外へ進出したことや、現地の方々のやさしさは、相手を思いやる気持ちがなければできないことだったと思います。インドネシアは、私にそういった大切なことを教えてくれた国です。いつかきっとまたインドネシアへ行きたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月29日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立御殿場高等学校	氏名	大胡田 葵心	学年	2

1 目的・応募理由

現在、私は高校卒業後の進路として、国際関係の大学への進学、もしくはホテル業界への就職を考えています。現地の方と直接外国語で会話をするに加え、ホテルでの業務を見学させていただけることは、進路を明確にさせたいと考えている今の私にとって、とても良い機会であると感じたため、今回のインターンシップに応募をしました。

2 研修内容等

実施前研修

令和7年7月20日(日)

- ・海外インターンシップ内容説明
- ・自己紹介
- ・国内研修について
- ・海外渡航について
- ・海外研修について



国内研修

令和7年7月28日(月)

- ・会社概要
- ・事業概要
- ・企業理念
- ・宿泊業の業務内容・概要
- ・インドネシアについての概要



海外研修

令和7年8月17日(日)から8月20日(水)

8月17日(日) ▶ 移動 (羽田空港発 スカルノハッタ国際空港着)

8月18日(月) ▶ 午前：ホテル呉竹荘見学

午後：現地スタッフとの交流

8月19日(火) ▶ 市内研修 (ジャカルタ大聖堂、イクティクル・モスク、タマン・ミニ・インドネシア・インダー)

8月20日(水) ▶ 移動 帰国 (スカルノハッタ国際空港発 羽田空港着)

3 感想等

私は今回の研修で3つのことを学びました。

1つ目は経営戦略です。呉竹荘にある日本食のメニューを外国人が好んで食べていたり、数ある部屋の中から意図して和室の部屋に宿泊したりしていることを知り、日本の企業が海外進出することは、日本にとっても他国の人にとっても需要があるということを知りました。

2つ目はイスラム教徒に対する配慮が必要であることです。研修中にカツカレーをいただく機会がありました。イスラム教では豚肉の摂取が禁止されていることから、その際のカツには日本で一般的な豚肉ではなく、鶏肉が使用されていました。また、イスラム教徒の女性は肌を見せない文化を持っているため、呉竹荘の大浴場を利用する際には、使い捨て下着を着用するという決まりがありました。この経験から、イスラム教の人でも日本の食事や習慣を体験するための配慮やおもてなしが、海外進出する企業ならではのこだわりなのだと学びました。

3つ目は他人との関わり方です。私がホテル内にある大浴場への行き方が分からず困っていた時、同じエレベーターに乗っていた外国人が大浴場まで案内してくださるということがありました。この出来事に私は、言語が伝わらなくても他人に優しく接しようとする勇気と行動力に感銘を受けました。また、将来異国の方と関わることのできる職業に就きたいと考えている私にとって模範となる経験になりました。

この研修で現地の方と交流をしたことで、自分とは異なる言語や文化を持つ人と同じ話題について語り合えることの楽しさを実感し、将来は海外の人と関わりながら仕事ができる職業を目指していきたいと感じました。

改めて、このような貴重な機会をいただきありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア			
校内発表会	8月29日		(対象)	全校・学年		
学校名	静岡県立富士宮東高等学校	氏名	曾根川 智貴	学年	2	

1 目的・応募理由

私が今回の高校生海外インターンシップに参加した理由は、二つあります。一つ目は、実際に外国へ赴き、日本と外国がどの程度文化や価値観が違うのかということを実際の目で実際に見たかったからです。二つ目はグローバル化が叫ばれる昨今においてそのような時代に対応できるような能力を自分自身が早くから少しでも身につけるためにも海外へ行って経験を積みたかったからです。私は将来県内企業で活躍したいと考えていたので、国際的な事業展開でホテル業を営む県内企業である呉竹荘を選びました。

2 研修内容等

研修内容は主にホテル内の見学でした。ホテルの裏側とも言える壊れた品を修理する特別な部屋や、特別な客室などを見学しました。そして、大浴場やテラスなどはすべて和風な装飾が施されていました。また、イスラム教の礼拝室もあり、インドネシアの異文化を理解し、その文化に合わせた工夫を県内企業がしているということが目に見えて分かりました。見学ツアーの後には、インドネシアの歴史を学んだり、インドネシア料理を実際に作って食べたりする経験をすることができました。インドネシアの歴史や現代のインドネシアを取り巻く様々な問題に関しては現地の大学教授、大学生、呉竹荘の支配人に教えていただきました。インドネシア独立時の残留日本兵の話では、日本とインドネシアの今の友好関係が複雑な歴史を辿って完成されたものであることを知りました。最初は日本がインドネシアを侵略する側でしたが、日本が敗戦すると、インドネシアに残留していた日本兵が日本が侵略を正当化するために掲げていた口実である大東亜共栄圏を本当に実現しようと、インドネシアの独立のために、オランダとの戦争に協力し、インドネシアのために貢献する立場に変わったと分かりました。インドネシアにおける問題は、目覚ましい経済成長の裏での大気汚染といった環境汚染の問題や洪水、頻繁に起きる渋滞など、特有のものがありました。

3 感想等

今回のインターンシップにより、私は沢山のことを学びました。まずは、県内企業が海外でも売上が伸びるように現地の文化を理解し、現地のニーズに合わせた工夫をしているということです。例えば礼拝室の設置や、食事では豚肉は使わず、肉料理は必ず牛肉か鶏肉のどちらかを使うなどです。インドネシアでは、多くの点で日本と異なります。多くの方がイスラム教を信仰していて、豚肉を食べてはいけない、決まった時間にメッカの方向へ礼拝しなければならないなどのルールがあります。このように宗教的な理由でインドネシアでは日常生活で気をつけなければいけないことが沢山あります。そして、インドネシアでの文化や価値観にそぐわないサービスをしていたら、その企業のインドネシアでの売上は伸びません。そうならないためにも、県内企業が異文化理解をし、現地に合わせた工夫をしていることは、今回のインターンシップだったからこそ知ることができたものだなと思いました。そして、外国と日本の違いとして、人と人との壁があまりないように感じました。私としては正直な所、インドネシア人はフレンドリーな印象はあっても、実際はそれほどではないのではと思っていましたが、本当にフレンドリーで驚きました。会う人全員が笑顔で接してくれて、また優しく迎えてくれたので、インドネシアに対するイメージが全く変わりました。英語が未熟でも手振り身振りや単語などでも伝えることができ、大体はその場の雰囲気ですぐにかなりなりました。

今回のインターンシップでは、企業が海外でも通用するビジネスを行うには、異文化理解が不可欠で、現地の文化を尊重、理解して初めて海外で活躍できるということを知り、また文化や価値観が全く異なる国でも人々の優しさや温情には国境がないということを知ることができました。グローバル化が叫ばれる昨今において、静岡県も例外ではありません。将来静岡県で働くときは、今回のインターンシップで得た経験を糧にしていきたいです。また、異文化理解をもっと深め、発信していけるようになりたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月14日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立静岡農業高等学校	氏名	望月 れい	学年	2

1 目的・応募理由

経験として一度海外へ行ってみたいと思ったからです。きっかけは母から聞いた留学の話で日本と海外では何が違うのか、考え方を学びたいと思いました。

ニュースや新聞、ネット上では海外の画像や映像、情報を見ることができます。しかし、画面越しで見ただけと、実際に自分が外に出て実際に見に行くのでは全く違うと思います。画面越しでは分からないことや現地の人と話すこと、言語・文化の違いに触れて、自分の視野を国内、国内から見た海外ではなく海外から見る、見られることで広げられると良いと思い応募しました。自分が外国人になることはなかなか体験できることではないですし、良い機会だと思います。

また、進路がまだ決まっていない私は、できるだけ多くの資格を取得することや、この二年生の間に色んなことを経験しておきたいと考えています。この海外研修は、自分の中で大きな経験になると思い応募しました。自分の生活している国から出ることによってこれからの自分の視野が広がり、一つの方向からではなく、いろんな方向から物事を見たり、考えたりすることができるようになると思います。

国内でもビジネスがグローバル化している今、そのような物事の考え方や、見方は社会で必要になる力だと思います。社会で必要になる力を今から養っていくことで、社会に出て貢献できるようになりたいです。

2 研修内容等

具体的には、ホテルでの工夫、限られた部屋の数、スペースで集客する方法、インドネシア文化交流、インドネシアでの食事、交通についてでした。

はじめに、ホテルの内装の工夫を教えてくださいました。呉竹荘とはまた違う雰囲気、日本の四季をイメージした内装になっていました。場所ごとに春夏秋冬が分けられていて、それぞれ季節が感じられる内装でした。部屋の数が少なく、スペースが限られているので、限られたところでも、魅力を感じてもらふ工夫が必要でした。実際に各部屋へ案内してもらいました。そこで、いくつかの部屋は日本の有名な場所をテーマに、壁の飾りや、インテリアの色、床を畳にするなどの工夫が見られました。

次に、提供されているサービスについて教えてくださいました。ホテル呉竹荘クマンジャカルタでは、男女で違う温泉や、漫画を読むことができるスペース、着物のレンタルサービス、体を動かせるジムのような部屋、マッ



サージをしてもらえる場所、結婚式を行えるなどの様々なサービスがありました。部屋数がない分、数多くのサービスで補っていることがよく分かりました。

最後に、文化交流会では、実際にインドネシアの食べ物で、「ガドガド」というサラダのようなものを作ってみる体験をしました。日本では見ない、餅のような食材があり、食べたことのない味でしたが、ピーナッツの味が強く、美味しかったです。他のインドネシアの食事「ルンダン」などについても教えていただきました。紹介されたものを実際に食べることができ、インドネシアの食文化に触れることができ、良かったです。



3 感想等

初めて行く場所で、違う言語を使うことや自分が外国人になるということを体験することができて、貴重な経験をすることができました。

自分の住んでいる国から出ることに最初は不安があり、緊張していましたが、飛行機から降りたあとの建物や植物などの景色を見て海外に来たということを実感しました。見るもの全てが新しく、知らないものばかりで期待が膨らみました。日本の店で売られているのをあまり見ないコウモリランという植物など自然に見られて興味深かったです。

日本と違うところは服装や、言語、食べ物からよく分かりました。特に食べ物は、現地の人々が普通に食べているのに、私達にとってはとても辛いと感じるものがいくつかありました。日常生活が宗教と深く結びついていることが印象的でした。実際に、インドネシアではイスラム教を信仰している人達が多く、宿泊施設に礼拝室が設置されていることが少なくないそうです。礼拝室があるかないかや、広さで宿泊を判断することがあるそうです。日本ではこのように宗教と生活があまり結びついていないので、違いを感じました。

ホテル内などで現地の人と英語で会話をすることができました。住む国が違っても言語が通じたことや、自分の英語が現地の人々に通じて会話ができたことがとても嬉しく、勉強できて良かったと感じました。インドネシア語がよく話されていましたが、英語が通じる国は多いので、この経験を英語の勉強の励みにしてこれからも頑張っていきたいと思いました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	10月14日		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立静岡商業高等学校	氏名	植松 小春	学年	2

1 目的・応募理由

私は、この海外インターンシップで、今後の進路を考えるきっかけを得て、自分の視野を広げたいと考え参加しました。私は、商業高校に在学しており、ビジネスマナーやビジネスマネジメントの授業を通して、社会で必要とされる幅広い知識を学んできました。挨拶や言葉遣いといった基本的なマナーだけでなく、組織の中での立ち振る舞いや相手の立場を理解して行動する姿勢など、実際に社会に出てから必要とされる力を意識的に身につけてきました。

こうした学びは、日本国内での将来のキャリア形成に役に立つものですが、私はそれをさらに広げ、海外という新しい環境の中で試してみたいと強く思うようになりました。

この研修に参加する理由の一つに、異文化に触れることで自分の視野を広げることがあります。国によって働き方や考え方は異なり、その違いを受け入れながら仲間と協力していく経験は、柔軟な適応力や発想力につながると思います。実際に現地で多くの人と交流をすることで、授業だけでは得られないコミュニケーション能力を高めることができると考えています。今回のインターンシップでは、日本とインドネシアのビジネスマナーの違いを実際に体験することで、自分の視野を広げ、より実践的な力を身につけたいと思います。

2 研修内容等

インドネシアに到着して1日目は、ホテルツアーと現地の大学生達との交流を行いました。ホテルツアーでは、客室を見学し、部屋の広さや設備が料金によって異なることを実際に目で見て確認することができました。また、客室の見学に加え、駐車場スペースや倉庫の中も案内していただき、ホテルの裏側を学ぶことができました。日本のホテル呉竹荘がインドネシアに進出しているため、浴衣やお茶のセットが部屋に用意されており、浴室には温泉が設置され、海外にいながらも日本らしさを感じることができました。また、館内には礼拝室もあり、イスラム教徒がお祈りを行う環境が整えられていることも知ることができました。

現地大学生との交流では、一緒にインドネシア料理「ガドガド」を作って食べる体験をしました。そのほかの伝統料理についても、味や作り方を体験することで現地の食文化について理解を深めることができました。



「ガドガド」作り体験

また、インドネシアの交通事情や社会問題についての話を聞き、バス移動中には渋滞の様子やバイクの3人乗りなど、日本とは異なる交通事情を体験することができま

した。

観光では、モナス、タマンなどの都市を訪れ、モスクやジャカルタ大聖堂などの宗教施設を見学しました。モスクでは、イスラム教徒が日常生活で宗教を大切にしていることを実感し、礼拝の時間や服装、建物の構造からイスラム文化を学びました。神聖な場所なので、靴を脱ぐ必要があり、警備員もいて、モスクは人々から大切に思われている場所だと再認識できました。ジャカルタ大聖堂では、カトリックの建築様式や歴史を間近で感じることができ、宗教施設の違いや文化の多様性を体感しました。モナスでは、インドネシアの独立の歴史や建設の経緯について学び、歴史を通して国の成り立ちや人々の努力を理解することができました。さらに、タマン・ミニ・インドネシア・インダでは、現地の建物や生活様式を一度に学ぶことができ、インドネシアの各地域の特色や文化の違いを直接見るすることができました。

3 感想等

今回のインドネシア研修では、日本との生活習慣の違いを肌で感じ、多くの学びを得ることができました。まず生活面では、トイレットペーパーを流せないトイレや、分別しても処理しきれないゴミの現状にも驚きました。普段何気なく使っている日本の設備や衛生環境のありがたさを改めて実感するとともに、異なる文化や事情に合わせた柔軟な対応の大切さを学びました。交通面では、車より圧倒的に多いバイクの姿があり、日本の都市とは全く異なる光景でした。道路には大きなテレビが設置され、夜でも街全体が明るく、近未来的な雰囲気が広がっていました。車やバイクの量が多い分、二酸化炭素排出量も気になりますが、アプリで排出量を確認できる仕組みがあり、環境問題に対する意識の高さも感じられました。こうした生活面の違いは、日本がこれから多様な文化や価値観を受け入れるうえで学ぶべき点だと考えました。

観光では、ジャカルタ大聖堂とイスラム教のモスクを訪れ、宗教の違いに触れました。インドネシアはイスラム教徒が多数派ですが、キリスト教の教会も大切に守られており、多様な信仰が共存していることに驚きました。それぞれの信仰が生活に深く根付いている様子を目の当たりにし、日本との文化の違いを感じると同時に、互いを尊重する姿勢の重要性を学びました。

今回の研修を通して、生活の中にある違いに気づくことで、文化や環境を理解する大切さを学びました。日本に戻った今、異文化の視点を取り入れながら、環境や生活習慣の改善に生かしていきたいです。インドネシアの人々が日本のアニメや漫画を通じて日本語を学び、温かく笑顔で接してくれるように、私もまた相手の文化を理解し受け入れる姿勢を持つことが大切になります。今回得た学びを基盤として、将来は異文化交流の懸け橋となることができるように成長していきたいと思えます。



イスティقلال大モスク外観



イスティقلال大モスク内部

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	未定		(対象)	全校・学年	
学校名	静岡県立浜松大平台高等学校	氏名	佐野 楓真	学年	2

1 目的・応募理由

私は総合学科人文科学系列で、静岡県の都市の魅力調査に取り組んでおり、この探究心は海外の多様な文化やビジネス環境への理解につながると考えている。

また、高校卒業後の大学進学を見据え、座学だけでは得られない実践的な学びと異文化理解を深めたいと考えている。特にインドネシアのビジネス環境に身を置くことで、世界や人口の多い地域で通用する課題解決能力やコミュニケーションスキルを養いたいと考えた。この経験は、将来の専門分野を深める上で貴重な糧となり、グローバル社会で活躍するための視野と自信を与えてくれると確信し、本インターシップへの参加を希望した。

2 研修内容等

《国内研修》

- ・インドネシアについての説明
- ・現地ホテルについての説明
- ・ホテル業界の説明
- ・会社の概要について
- ・インドネシアへ渡航する際の注意点

《海外研修》

8月17日(日) 移動

8月18日(月) ホテル呉竹荘見学、現地スタッフとの交流

- ・ホテル概要と利用客に関する説明
(利用客のほとんどがインドネシア人、コロナ禍による日本人宿泊客の減少)
- ・ホテル館内の特徴的な施設の紹介
(日本風の装飾、和服のワードローブと結婚式、漫画コーナー、礼拝室、大浴場)
- ・客室の見学と説明(畳の部屋が人気、日本の雰囲気味わってもらうことをコンセプトにした客室の改装)
- ・インドネシアに関するプレゼンテーション(インドネシアと日本の関係、ジャカルタの未解決4大問題「洪水」「ごみ」「渋滞」「空気汚染」、インドネシアと日本の職場文化と社会的環境文化の違い)
- ・スダ族とスダ語の紹介(スダ文字で自分の名前を書く体験)
- ・インドネシア料理の試食と手作り体験(エス・チェンドル、牛肉ルンダン、ガドガド)
- ・インドネシアの交通手段や昼食についての説明



8月19日（火）市内研修（タマン・ミニ・インドネシア・インダー、イスティクラル・モスク、ジャカルタ大聖堂）

8月20日（水）移動、帰国

3 感想等

インターンシップで訪れたインドネシアは、町が活気に満ち、鮮やかな色に彩られていた。

飛行機での移動は、機内食が予想以上においしかったものの、思っていた通り慣れない移動で少し疲れた。

しかし、インドネシアに到着してからは、おいしい海鮮料理を堪能することができ、疲れも気にならなくなった。ゆでた野菜に甘辛いソースをからめて食べる伝統的なサラダ「ガドガド」や緑色のゼリーのようなスイーツ「チェンドル」といった現地の味を楽しむこともできた。

インドネシアで過ごした4日間の研修で、私は様々な経験をさせていただいた。その中でも、私にとって特に印象的だったのは、店員とお客さんとの距離がとても近かったことである。お客さんの中に誕生日を迎えられた方がおり、その方の誕生日を陽気に祝うような温かく和やかな雰囲気に触れることができた。接客するときに大切にしていることを感じることもできた。

建物は限られたスペースに工夫が施されていることに気づいた。また、インドネシアにも畳業者がいることには驚いた。

インドネシアでの研修を通して日本とは違う文化を肌で感じる事ができ、とても充実したインターンシップになった。将来は、静岡県内の企業で地域活性化に貢献できる仕事に就きたいと考えている。今回のインターンシップで得たグローバルな視点を活かし、県内の魅力を国内外に発信したい。特に、文化や観光の側面から地域経済の活性化に寄与したい。県民が誇りを持つことができる、持続可能な地域社会の実現に貢献できる人材になりたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月1日		(対象)	全校・学年	
学校名	沼津市立沼津高等学校	氏名	山道 はるか	学年	2

1 目的・応募理由

今回、私が海外インターンシップに参加した理由は二つあります。

一つ目は、「海外で学びたい」という目標があるからです。これまでも何度か海外で学ぶことを考え、情報を集めてきました。しかし、前提として海外での活動は費用が高く、サポート体制やスケジュールの質などを考慮すると、「本当に学びたいことが学べるのか」「現地の方々とどれほど関わることができるのか」といった不安や疑問が多く、ハードルが高く感じてなかなか実現できずにいました。そんな中で、今回のプログラムは事前研修があり、県が実施するため信頼も厚く、費用面での支援もあるため、安心して挑戦できる大きなチャンスだと感じ、参加しました。

二つ目の理由は、この経験が将来に活かせると確信していたからです。私は将来、接客業に就きたいと考えており、初対面の方や異なる文化・価値観を持つ人々と関わることを通して、より広い視野や柔軟な対応力を身につけたいと考えています。そこで呉竹荘ならではのホスピタリティ、日本と海外のおもてなしの違いについて知りたいと思って研修に臨みました。現在、少しではありますがホテル業にも関心があり、実際にその現場を経験できるのは貴重な機会だと思いました。

2 研修内容等

○実施前研修

事業の趣旨説明・海外インターンシップの内容説明・渡航ガイダンス・グループ別説明

○国内研修

会社概要・事業概要・宿泊業の業務内容概要・インドネシアについての概要

○海外研修

ホテル業務見学・交流会・市内研修



3 感想等

参加者の学生の方々も引率して下さった先生も現地の方々も関わる全ての方が優しく親切で本当に親しみやすかったです。研修の時に不安で話しかけられなかった私に、みなさんフレンドリーに接して下さり、全員と話すことができたので良かったです。海外の現地の方々も私たちが日本人だと分かると「ありがとう」や「大丈夫」と日本語で話しかけてくれました。おもてなしの心が深く、わからないこと丁寧に教えてくれました。とてもフレンドリーでレストランではコミュニケーションがうまく取れない私たちに初対面にもかかわらず、積極的に関わってくれ、誕生日の子を急遽お祝いすることになっても全力で祝ってくれました。この出来事が最高の思い出です。

次に感じたのは日本とインドネシアのおもてなしの違いでした。日本とインドネシアのおもてなしは、日本は事前にお客様の要望を察したり、言葉遣いやサービスを丁寧にしたりします。一方でインドネシアはお客様に積極的に話しかけフレンドリーに対応するという違いがありましたが、双方素敵なおもてなしだと思いました。

私がインドネシアで一番驚いたのは信号が基本的にないことです。そして基本信号はないので、信号があっても守らない。歩行者はタイミングを見計らってダッシュするなど日本では考えられないことばかりでした。日本の当たり前は少し場所が変わるだけで当たり前じゃなくなるということを目の当たりにしました。



また、私は日頃から「挑戦は自己成長につながる」と意識していますが、実際には不安になり、ネガティブな気持ちになることが多々あります。しかし、今回の研修でインドネシアの皆さんが私に積極的に話しかけてくれたことがとても嬉しく、私の気持ちを明るくしてくれました。私は人と関わることがあまり得意ではなく、自分から話しかけることができませんでしたが、この経験から「自分から積極的に関わること」の大切さを学びました。挨拶だけでも自分からすることで、相手に与える印象が変わります。そして、それが相手を少しでも明るい気持ちにさせることにつながると感じました。この経験を通して、もっと自分から人との関わりを増やしたいと思うようになりました。